

「大腸疾患の鑑別診断」

長 廻 紘 東京女子医科大学講師 著

関東通信病院部長

多賀須 幸 男

1969年に竹本教授と共に全結腸の内視鏡検査を世界にさがけて成功し、そののち一貫して腸病変の診療に精進している長廻博士の文字どおりの労作である。少し前に出版された同名の英語版は、海外で好評を得ていると聞いている。日本の医学書には珍らしい瀟洒な表紙を持つ320頁の本を、数日かけて読ませていただいた。192頁の本文のあとに40症例の提示があり、そのあとに簡単な手技の解説が付けられている。内視鏡だけでなくX線および病理所見も詳しく、鑑別診断を通じて書かれた大腸疾患のモノグラフになっている。

“大腸疾患の種類は豊富であるが、全体をよく眺めてみると診断は割り切って考えることが可能であり、より現実的である（自序より）”

との考えで書かれた著者の試みは見事に成功しているように思われる。大腸病変の理解を困難にするのは炎症性疾患（IBD）にあるが、著者はその疾患の特徴像のうちで潰瘍性大腸炎に合うところはどこで、異なるところは何かという視点に立って、その各々の病変を解説している。これは極めて現実的な、実際に役立つ方法と思われた。

1975年に竹本教授と共著で出版された「大腸疾患アトラス」は日本の大腸内視鏡学の原点と言えよう。それ以降、大腸病変について日本の研究は大幅に進んだ。本書は言うまでもなく著者の多数の経験をまとめたものであるが、内外の600余篇の文献を消化し尽し、その経験で選別して、必要なことだけを歯切れのよい文章で示してあることにも特徴があ

る。実地に役立ちそうもないことは思い切りよく省いて、その代わりに稀ではあっても知っておくべきポイントが随所にさりげなく書かれていて、教えられるところが多い。

この本を開いてまず感心するのは、鮮明な内視鏡カラー写真である。それにも増して、病態を理解するのに最適な拡大とトリミングで示されている多数の標本の写真は、病理学教室で学んだことのある著者ならではのものと驚かされる。もちろん、医学写真部の技師諸君の腕前に支えられてのことである。29,000円という価格に十分に見合う立派なアトラスになっている。

胃の勉強がひとまず済んで大腸に取りかかろうとするときに最も悩まされるのは、仮性ポリポージス、fissuring、憩室炎などをのみ込めず戸惑うことである。評者もその1人であったが、そのような先生方には特に、この本をぜひお読みになるようにお勧めしたい。大腸の診療に携わる人たちに非常に役立つ本である。

B5判 336頁 1983 年 ¥29,000

医学書院 刊